

瓦の底力

やきものの里の未来

□上

西三河地方の高浜、碧南市が全国に誇る地場産業「三州瓦」。しかし、住宅着工件数の落ち込みや屋根材の多様化で、近年の業界を取り巻く環境は厳しい。品質や環境面での売り込みや海外での販路拡大、芸術性の加味など、メーカーの生き残りを懸けた取り組みを追う。

(早川昌幸)

先進の高性能開発

三州瓦は「三河土」と呼ばれる良質な粘土を産出する西三河を中心とする地域で、江戸期から生産されてきた。現在では和風の「J形」、洋風の「S形」、平板な「F形」をはじめ、商品バリエーションも豊富になった。高い耐久性や、焼成する際のひずみの少なさを、釉薬の表面にできるピンホールの少なさなど、品質が強みだ。

シエア(市場占有率)は他産地の島根や淡路を圧倒しているが、時代の変化による出荷枚数の減少で、伝統にあぐらをかくことはできなくなった。メーカーの新東(高浜市論地町)では「瓦の次世代を創造する」を方針に掲げ、「環境瓦」など新製品を開発に力を入れる。その一つが陶器瓦の表面にスナゴケを固定した製品だ。コ

省エネ、防災で工夫



環境に優しい瓦製品を手にする石川常務(高浜市の新東で)

ケの保水性と蒸散効果でヒートアイランド現象を緩和する。遮熱によって住宅の冷暖房に必要な電力を抑え、省エネルギーも期待できる。

石川大輔常務(三)は「芝生も考えたが、コケにたどり着いた。暮らして潤いを与えたり、メンテナンスが要らないのも特長」と説明する。太陽電池を使う「一体型太陽光発電システム」との組み合わせ提案。コケ瓦は、太陽光発電を導入した住宅設計を競う今秋の世界大会「ソーラー・デカスロン・ヨーロッパ2012」に出場する千葉大のチームに採用された。

モダンな造りの住宅が増え、省エネ効果がある。三州野安(高浜市田戸町)のクールルーフは、他社と異なり明るい色が特徴だ。名古屋工業大との産学連携で開発した。「特殊な釉薬を塗り、可視光を中心に反射し、反射率は60%を超える」と山田辰嗣品質保証部長(三)は説明する。半面、瓦らしくない白っぽい色がユーザーに理解されにくいといった課題もある。

施工の面でも改良が進められている。業界は、棟の部分を手だけで支え、地震の揺れに弱い旧工法で施工された瓦屋根を、解体せずに金具やビスで補強する工法を開発した。阪神大震災クラスの揺れにも耐えられるという。

メーカー各社は、時代の流れに対応した技術開発と、瓦の持つ良さを発信に日々取り組んでいる。